
雨の日にどこでもない場所で

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の日にどこでもない場所で

【Nコード】

N2808C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

雨の日に少女が消えた。誰にも知られずに。そして、少女は――

雨が容赦なく彼女を打っていた。

ぬかるんだ地面に点在する、見た目だけは澄んだ、泥で濁ってない水溜まりに移る彼女は雨に濡れてもなお、ゆるくウェーブのかかっている黒髪を腰のあたりまで垂らしている。とめどなく水滴が流れていた。彼女の身につけているものといえば、青い長そでワンピース、それに柔らかそうな茶色い皮の靴、服と同色のリボンだけ。

かさもさしていなければ、カッパも着ていない。雨に濡れるまま身を任せている。

年はだいたい、十五歳ほどか。おおそ雨の中を歩くこととは無関係そうな服装の少女だ。

辺りはもう薄暗く、時刻が夕方であることを示していた。森の中だ。昼も暗くて、夜や黄昏時には決して近づきたくないような不に気を持っている。まるで魔物でも出てきそうなくらいに。

彼女は何かに導かれるように歩きつづけている。焦点は合っていない。虚ろな瞳はアクアマリンに良く似たガラス玉のようだった。彼女は気付いていなかった。自分の体が透けてきているということに。

彼女の体からは、まるで物が古くなって色褪せていくのを早回しで見ているかのように色素が抜けていって、輪郭も薄くなっていた。

そして、最後には消えてしまったのだ。誰にも知られることはなく、ひっそりと。いいや、一人だけ、彼女の婚約者は知っていた――

固い床の感触があった。

いつのまにか――そう、知らないうちに知らない場所に来て、彼女はたっているのだった。ひどく頼りない。今にも倒れそうだ。

そこは少なくとも雨は降っていなかった。彼女の見たまを述べるとするのなら、書庫または書斎のようだ。

四方には彼女の身長のように二倍はあるような本棚があつて、ぎつしり本が詰まっている。天井はそのさらに上、本棚と半分ほどの高さだ。その上窓がなく、明かりはそう明るいとは思えない、本を読むぎりぎりの照明となつていて、暗い光球がいくつかあるだけ。小さなテーブル、というか机があつて、多分飲み差しだろう紅茶のカップが置いてある。ハーブ・ティーのようだ。ほのかにラヴェンダーの香りがする。

本が山のように積まれている。いすの上にオプションのように少年がいるのが見えた。なぜか室内だというのに暑苦しそうな長いマントを羽織り、半分本に埋もれるようになっていて。

「……やだ……！ どこよここ！ なんてあなた、ここにいるの？」
「それはこつちのセリフだ。お前が突然現れたんだろう」

立ち上がりもせず少年はいった。極力抑揚を押さえたような、感情を押し殺したような凍てついた声音で。

「あら、ごめんなさい。それは知らなかったわ。私、気付いたらここにいたものだから」

「……迷子か。お前はいつの生まれだ？」

「……え？ 私？ テイルカ王国暦で七百六十四年の花月の三日月の日だったと思うけど」

あごに軽く手を当てて考えながら彼女は答えた。普段ならよどみなく言えるはずのことなのに、思い出すのに多少の時間を要した。

「……今は、ティルカ王国暦というなら三百五十四年だ」
「え？」

「理由は不明だが、お前は過去に迷い込んだらしいな」

こともなげに返されて、彼女は少しむつとした。冷たくあしらわれたことなど、今までになかったのだ。だが彼女は不快な気分をあえて心の奥底に押し込めて笑って見せた。

「私、フェリシア。あなたは？」

「どうして名乗らなければならない？」

「だって、私は帰り方を知らないもの。帰る方法が見つかるまでここにいるんだもの、名前も知らないんじゃないやりにくいわ」

「……ここに居座るつもりか？」

少年はあからさまに嫌そうだ。

「私の知り合いはこの時代にはいないもの。それとも、あなたはぬれねずみの女の子を外に放り出す気なの？」

「……フェリシアはひどく適応能力に優れた少女なのだった。

「できればすぐにでも出ていってもらいたい」

人形が定められた言葉を口にするときのような顔をしている——とフェリシアは思った。ひどく繊細できれいだけれど。

「ひどい人！」

「ひどくない。人の家に勝手に上がり込んで、何を言っている」

「……いいわ。ただでは言わない。家事でもなんでもするから、ここに置いて欲しいの。私、他に行くところなんてないもの」

少しかがんで、フェリシアは少年を上目遣いに見上げた。うるんだ瞳で見つめる——これほど有効な手段はないと、フェリシアはそう信じて疑わない。

「うつとおしい。分かったからその暑苦しい目を止めろ」

「まあ！ 良かった。あなた、見たところ魔法使いなんでしょう？ 何か、未来に戻る方法は知らない？」

大袈裟に喜び、フェリシアは訊ねた。

「図々しいにもほどがある。自分でなんとかしろ」

少年は不機嫌そうに音をたてて立ち上がり、部屋から出ていこうとした。

「ね、名前は？」

すかさずフェリシアが少年の前に回り込んだ。

少年は絨毯が泥水でべちょべちょになるのを見て、いつそう不機嫌になったようだった。

「……アンディ」

「アンディ？ それだけ？」

「そう。ただのアンディだ」

「ふーん。家族とかは？」

「いない。それより、お前はどのようにしてここに来た？ 前にもあったのか？」

もう怒る気力も失せたようで、アンディは無愛想な顔で訊ねてきた。

「ないわ。私は普通の女の子だったもの」

「それなら、ここ一週間の記憶を引っ張り出してみるがいい」

言われて、フェリシアは一生懸命に記憶の糸を手繰り寄せた。

（私はティルカ王女のフェリシア。ティルカよ。ええ、まずは、ちょうど七日前。確か、勝手に城を抜け出して叱られたわ。六日前は面白くもないパーティがあった。五日前には大雨が降って憂鬱だった。四日前は誕生日だった。十五になったのよね。三日前は——記憶がない……？）

「記憶がないのだろう？ お前は、自ら望んでここに来たはずだ。どうしても忘れたことや嫌なことがあって、もともと持っていた時空間転移能力が発動した。たまに、そういうのがここに来る」

「どうなっちゃうの、私」

途端にフェリシアは泣きそうな顔になった。

「帰った者もいる。ここで死んだ者もいる」

「……そんな！ 私、そんなの困るわ！ 私はティルカを継がなきゃいけないのよ！」

顔を上げて叫ぶフェリシアをアンディは冷めたガラス玉の瞳で見つめ返した。

（でも……）

フェリシアは射すくめられたように動けなくなってしまう。そうして、ほんの少しだけ冷静に考えてみた。

（でも、発想の転換を試みればいいのよ。アンディも、なかなかの美形じゃない。あの性格はちょっといただけないけど、馴れれば

大したことじゃなくなるはずよ。美形と毎日会えるなんて、ラッキー
ーと思うのよ。うん)

フェリシアは面食いというわけではない。ただ、綺麗なものは嫌いじゃない、というだけで。

「家事でもなんでもすると言ったな？　ここに置いてやるのはいいが、働いてもらうぞ」

「いいわよ。家事は嫌いじゃないの」

安請け合いしてしまってから、フェリシアは後悔した。アンディは魔術士なのだ。家事、といっても、どんなことをするのか分からない。不気味な部屋を掃除させられたり、正体不明の材料で料理を作らされたり……するかもしれないのだ。

「安心しろ。多分、お前の想像は偏見だ」

アンディはガラスの瞳に、フェリシアが見る限り初めて感情のようなものを宿らせた。唇の端をわずかにつりあげる。

「まずは絨毯を掃除しておくんだぞ」

言い残して、アンディは出ていった。

あとに残されたフェリシアが、アンディが笑っていたのだと気付くには数分を要した。

その日から、奇妙な共同生活が始まった。

アンディは相変わらず——というか初めから——無愛想で、一生懸命働くフェリシアにねぎらいの言葉ひとつかけなかった。

それでも、フェリシアは気付いている。アンディはいつも彼女を気遣っているということに。ここに来た日も、そつと着替えを置いていってくれたし、どんなに失敗してまずい料理でも、残さず食べてくれた。

ある日のこと。アンディがフェリシアの部屋にやってきた。

「その服——もうぼろきれ同然だな」

唐突にアンディは言ってきた。異様に大きなスニーカーを持っていたので、フェリシアは旅行にでも行くのかと思ってしまったが。

彼女は彼にもらった服だからと、いつも着ていたのだが。もちろん、本人にそんなことは言えないので黙っていた。

「いいのよ、これで。掃除のときに汚しちゃっても、これなら構わないわ」

「そういうわけにはいかない。今日は客が来る。そんな格好をされては困る」

細くて頼りなげな眉根を寄せて、彼は彼女を見つめた。

「……でも、他には持ってないわ」

「そう言うと思って幾つか買っておいた」

スーツケースを開いて彼が見せた衣装は、彼女が城で着ていたドレスと並べても決して見劣りしないものであった。彼女が触れてみると、どれもシルクのような質感。ドレスと一緒に出てきた箱を開けると、たくさんの装身具が入っていた。指輪、ネックレス、ブレスレット、すべて金が銀を使っている。真珠やダイヤがあしらわれているが、どれも極上品だ。デザインが古いのは否めないが。

「これ、私のために？」

「客が来たときに、そのままいられるとこまるからだ」

「そういうことにしておいてもいいわ」

たくさん服を見て、いつになくうきうきしていて、他のことはさほど気にならなくなっている。

「客はすぐ来る。早く着替えておいてくれ」

前よりも優しげな輝きの宿るガラスの瞳に彼女は微笑みを返し、うなづいて、アンディを追いついて服選びを始めた。

いろいろと検討した結果、薄いブルーのドレスに、銀のアクセサリというところに落ち着いた。

鏡の前でぐるりと回転すると、スカートがふわっと広がり、銀鎖のブレスレットがしゃらん、と音を立てた。

「完璧だわ！ これなら、あの朴念仁も可愛いつて言ってくれるわ」
「……誰が朴念仁だって？」

鏡に映ったフェリシアのすぐ後ろにアンディが現れていた。ずっと

と鏡を見ていた彼女にも気付かれなかったということは、魔法を使つたのに違いないのだ。

（まったく、この人つてばなにを考えてるのか……）

「まあ、いい。客に茶でも出してやってくれ」

「はあい。ねえ、これ似合う？」

「どれを着ても結局は同じだろう」

アンディの返事は素っ気ない。彼にとってはこれが普通で、これ以上の返事を期待するのが無理というものなのだろうが。

それでも、フェリシアは面白くない。お世辞でも、「可愛い」って言うて欲しいのが乙女心というものなのだ。

「いつもお茶でいいのかしら？」

実際ははらわたが煮え繰り返る思い、というやつなのだけれども、フェリシアは微笑んだ。

（でももし、アンディのことが嫌いなのだとしたら、私はこんなことは考えないのかも）

そう思うと、不毛でもある。なにせ、フェリシアは四百年以上も未来の人間なのだから。いつかは帰らなければならないときが来ってしまう。アンディを連れ帰ることはできないのだ。

「それでいい」

言い残して、アンディは去っていく。つかみ所がないというか、理解しがたい行動をとる。フェリシアと同一年くらいに見えるが、時折老成したような表情を見せることがある。

「わからないのよね」

フェリシアに今までで分かったことなど、わずかばかりに過ぎない。

とりあえずは言われた通りにティーセットを取りにいった。いつでも適温のお湯が沸かしてあって、お茶が飲めるようにしてある。

最近は何事かになってるので、手慣れたものだ。カップを二つ用意して、薄めの紅茶をポットに入れて応接間に運んだ。

椅子に座っているのでよく分からないが、多分長身なのだろう男

が座っていた。

色が白い。病的な白さというのとは違う。それに淡い銀糸の髪を白金の髪留めで束ねている。瞳はサファイアブルー。女と間違えてしまいそんな美貌の青年。線の細い瘦身の体躯を白い長衣が余すことなく覆っていた。胸に輝いている聖印から、彼が僧侶なのだと知れた。

あまりの美しさに見入ってしまったしていると、青年はフェリシアに気付けて微笑みかけてきた。

「はじめまして、お嬢さん」

「はじめまして」

無礼にならない程度に適当に挨拶を返し、フェリシアは紅茶を注いだ。

「フェリシア嬢っていうのは君のことかな？」

余り声量自体はないのだが、良く通る声だ。透き通った透明感のある声が耳に心地よかった。

「私だけど……何か？」

ふと手を止めて、フェリシアは聞き返した。この時代に——もし、アンディの言うことが本当だとするなら、だが——フェリシアを知っている人物がいるはずがないのだ。

「……いや、アンディが今日、急にぼくを呼んだわけがやっと分かったな、って」

「え……」

「聞いてない？ アンディがぼくを呼んだわけ」

口元に手を当てて、いかにも可笑しそうに笑う彼の態度はフェリシアには余り面白くなかった。自分だけわかっているなんてずるい、という考えを彼女は持っていた。

「それも興味があるけれど……あなたには自己紹介してもらえないの？」

「ごめんね。ぼくはアンディの古くからの友人でね、ライルっていうんだけど」

苦笑混じりにライルは答えた。

「そうなの？ 私は知つての通りフェリシアだけど、どういうことなのかすごく聞いてみたいわ」

「つい昨日のことなんだけど、突然連絡があつてさ。何かと思えば、今日来い、つて。居候の女の子に服をあげる口実が欲しいつて……あれで結構、気に入つてみたいだよ。前から色々聞いていたし」

そのときに、軽い音を立てて扉が開いて、不機嫌そうな顔のアンディが現れた。ライルは慌てて口をつぐんだ。

「おい、余計なことは……」

アンディが怒っていることは声で分かった。フェリシアの腕にも鳥肌がたってしまう。

「アンディ、怒らないで。私が聞いたのよ」

フェリシアが言っただけで、空気が変わった。痛いほどに感じられた怒りが瞬時に収まっている。

「ちよつと二人で話すから、掃除でもしておいてくれると助かる」

「はい。それじゃ、後でね」

出ていく前に、一回転して、肩越しにアンディを見やった。

「ねえ、似合つてる？」

「……普通だろ」

アンディがものも言わずにフェリシアの部屋に駆け込んできた。彼にしては珍しく、頬を紅潮させている。見るからに嬉しそうだ。彼がこんな顔をしているなど、初めてのこともかもしれない。

「どっ、どおしたのっ！」

その様子に驚いて、フェリシアの声も上ずってしまう。

「見つけたんだ！ 接点！」

本を片手に叫び、フェリシアに抱きつく。

フェリシアは目を白黒させて、どうしたらいいか分からずにいる。
「接点つて？」

何のことなのかさっぱり分からずに、フェリシアがオウム返しに訊ねる。

（ノックもせずにアンディが入って来るなんて。少し大袈裟かも知れないけど、前代未聞だわ……）

「過去と未来をつなぐには、膨大なエネルギーが必要になる。普通の人間では、自分の力だけでは時空間転移は不可能だ。何か、二つの時空間をつなぐものがなければならぬ」

ふと、いつものアンディに戻る。

「それが見つかったのね？　じゃあ、私は帰れるの……？」

「ああ。だが、それにはまず、お前が現実を見詰め直すことだ」

「現実……？」

先ほどから、フェリシアは訊ねてばかりだ。分からないことだらけなのだから、仕方ないといえば仕方ないのだが。

「これを覗けば、すべてが分かる」

アンディが恭しく鏡を差し出した。円形の鏡で、銀で縁取りがされていた。華麗な装飾がこれでもかこれでもかというかのように施されている。

「未来視鏡だ。先を見通す予見者が力を込めた鏡——お前の時代も見えるはずだ。このまま帰っても、同じことを繰り返す。永遠に堂々巡りだ」

「……分かったわよ。やればいいんでしょ？」

余り気は進まないが、仕方ない。アンディの口調は有無を言わせないほど強い調子で、反論することはばかられた。

「でも、ずっとここにいちやいけない？」

「だめだ。歪みは修正されなければならない。歪んだままで在り続けることはできない。どんなに強い力を持った魔術士でも」

いつになくアンディは穏やかな顔で——微笑んだ。力なく。

「仕方がないのね。みんな、そればかりだわ」

フェリシアはため息をつく。

（本当にそればかりなんだわ……私にも……いつも、仕方がない

ってそればかり……」

「その鏡を覗き込めばいい。後は——お前次第だ……」
アンディは手近な椅子に座った。

「うん……」

フェリシアは鏡を見つめた。

いつも通りの自分が映っている。

その姿がゆらぎ——明らかに別のものを映し出す。鏡の中に広がるのは、ティルカの城——謁見の間。フェリシアの父である王がいて母である王妃がいる。人払いをしてあり、その他にはフェリシアしかない。

風景が広がって、フェリシアは鏡の中の彼女と同化した。

「フェリシア。これは、お前のためでもあるのです」

王妃は少しやつれている。フェリシアと同色の髪と瞳の、四十歳前後の女性だ。ティルカーとうたわれた美貌の持ち主だ。シルクのドレスが良く似合っている。

「わからないわ、私には。望みもしまい婚約の、いったいどこが私のためなの？ それって、政略結婚だわ」

紡ぐつもりも、紡いだ覚えもない言葉がフェリシアの口から出た。彼女は少し前、同じ光景をみたことがある気がしていた。

「フェリシア、彼はいい青年だよ。会ってみれば——きっと気に入る」

王は深い深いしわの刻まれた顔のしわをさらに深くした。

「いやよ！」

「わがままを言うてはなりませんよ。ティルカ王家の娘として国のために——仕方のないことなのですから」

「どうして？ 国のためって何？ 仕方ないってどういうこと？ 私の幸せとかはどうなるの？」

不思議なことだと、フェリシアは思う。国のためなら、一人娘の幸せさえも奪えるのかと。

「だって、魔法使いでしょう？ しかも、私よりもずーっと、年

上って話じゃない？ 年齢差が十歳くらいまでならまだ許せるわよ。でも、相手は七百歳を超えるおじいさんじゃない！ 我慢できるわけないでしょっ！」

「見かけの年齢はお前と変わらない。それに、この国は変革後間もなく、自国のことだけで精一杯で他国からの侵略を防ぐ余裕はないただ一人、名の知れた魔術士がいれば——」

「わかってる！ もう、耳は海産物で大賑わいだわ！ だけど……他力本願は絶対良くないわ！ 自分たちの国でしょう？ 私たちが私たちの力だけで守っていくべきなのよ？」

フェリシアは耳をふさぎたい気分だった。何も聞かないことにして、早々に立ち去りたかった——できないことだと分かっている（他人に——魔術士に頼って国を守って、それでいいの？ それじやいつまでたつても変わらない。同じことの繰り返しになるだけ。どうして分らないの？）

「……隣室に魔術士殿を待たせてあります。せめて、顔だけでも見せにお行きなさい。これは、もう決まったことなのです。諦め、従うのが賢明な選択です」

王妃は冷静に——というか、冷淡にフェリシアに宣告した。

「王族というものは——民のために己を犠牲にせねばならないこともあるのですから」

感情らしきものは浮かべない。長年の成果、というものだ。けれど表情から感情を推し量られてはならないのだ。

王と王妃はフェリシアを置いて去った。感情などかけらもない、あたかも人形のごとき表情で。

「……勝手だわ」

それしか言えない。フェリシアはそれしか許されていないのだ。王女など、所詮は翼をなくした鳥のようなものに過ぎないのだから行かなければならない。気に入るわけもないし、気に入りたくもないが。

隣室へは、直通のドアがある。話は聞かれていないはずだ。この

部屋は魔術で声の外にもれないようになっていた。

思い切ってノブに手をかけ、ドアを開けた。

「……」

中にいたのはアンディだ——どこも変わらない姿の。何も変わっていない。

その瞬間に、フェリシアは感じた。体全体を何かから引き剥がそうと思いいり張り張られているような感覚を。

「——思い出したようだな」

気がつけば、フェリシアの目の前にはアンディがいた。鏡の中ではなく、本物の。

「……ええ……」

「今見ての通り——未来において、もう一度出会う俺自身が接点だった。少し力を貸してやれば時空間転移ができるはず」

真摯な瞳でフェリシアを見つめ、アンディは言う。

「でも、ということなの？ あなたは変わらないなんて」

恐る恐る口にした。アンディは寂しそうな表情をした。触れられないことだったのか——

アンディはフェリシアに背を向けた。はずしたことなかったマントを脱ぐ。

「……！」

フェリシアは息を呑んだ。

アンディの背には——純白の小さな一對の翼があった。天使の翼のように真っ白な。

「俺は《翼持つもの》と呼ばれている種族の生き残り。今でさえも、残り少ない——」

「つまり、人間じゃないってこと？」

フェリシアは胸の前に手を組んだ。

「素敵じゃない！ こんな綺麗な翼を持ってるなんて。しかも、未来の私の婚約者なんて」

「変わっているな。誰でも、この翼を気味悪がるのに」

再びマントを着てアンディ。よほど意外だったのだろう、驚きの色を隠しきれしていない。

「どうして？ 自慢できるわ。それに、あなたのことなら好きになれそうなもの。それで十分よ」

笑顔でフェリシアはアンディに抱きついた。

「だから、待っていて。ずっと遠い未来で出会えるまで。それまで誰にも受け入れてもらえなくても——私がいる」

「……ああ。楽しみに待っているさ。小さな姫君」

アンディはフェリシアの額に軽く口付ける。誓いとして。

「また会いましょう。アンディ」

照れて赤くなるフェリシアは、この時間に存在する意味を失くした。来たときと同じように体が透けてくる。色素が失われ、実体をなくし――

アンディの腕の中でフェリシアは消えた。

城に帰ったフェリシアを最初に出迎えたのはアンディだった。

「おかえり、フェリシア」

「ただいま！ また会えて嬉しいわ！ 長い間待たせてごめんなさい！」

アンディに飛びつくフェリシアを、王も王妃も訳が分からず、ただ見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2808c/>

雨の日にどこでもない場所で

2010年10月8日15時09分発行